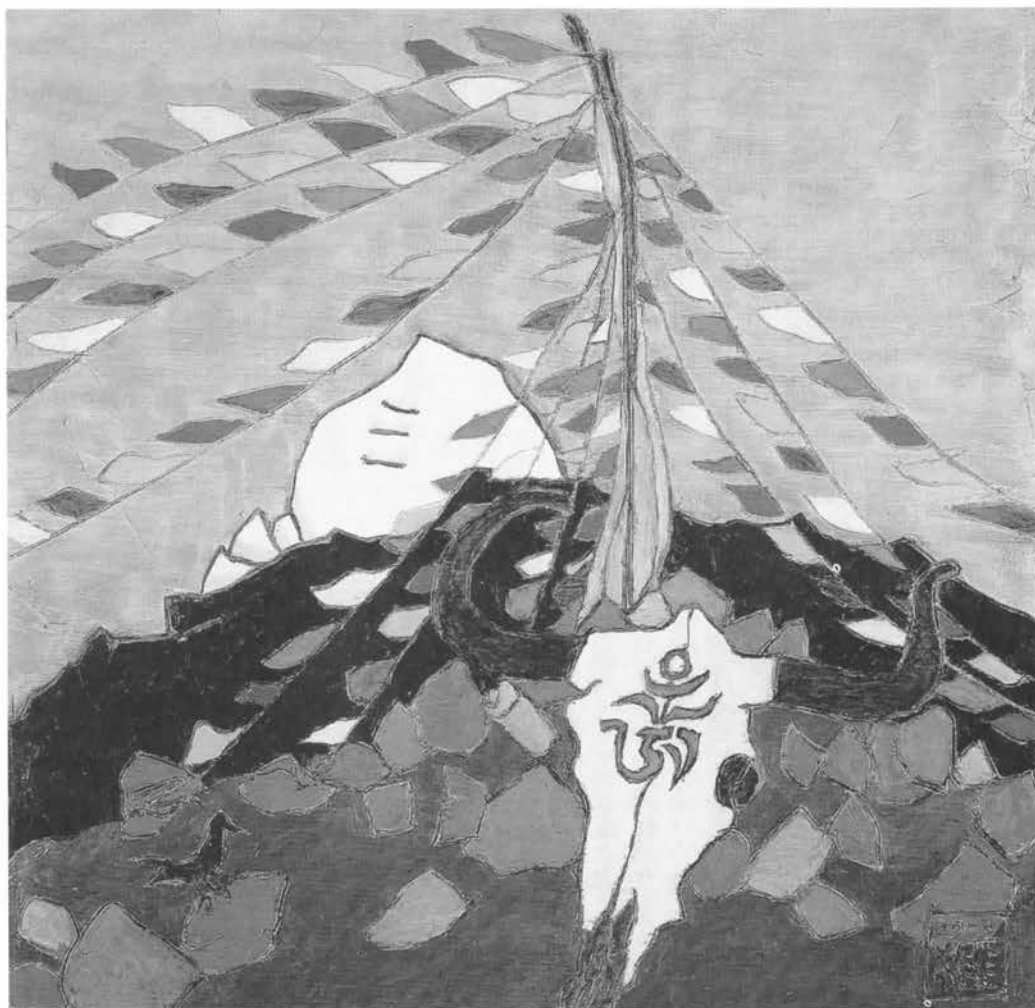


山と博物館

第48巻 第6号 2003年6月25日

市立大町山岳博物館

特集 「第5回 日本山岳画協会大町展」 7/12(土)~8/31(日)



カイルス山 熊谷 樞

第五回 日本山岳画協会 大町展開催にあたって

日本山岳画協会

日本山岳画協会は好んで山を描く画家の集団として、それぞれの道に精進していた人々を横に連ねて、互いに親しみを増し、作画にも、発表にも便宜を加え、鑑賞や研鑽の機会を多くしようという目的で昭和十一年(一九三六)に結成され今日に至っております。

足立源一郎、中村清太郎、石井鶴三、茨木猪之吉らを創立会員として発足以来、山を描く多数の画家の入退を経て、本年で六十七年になりました。

題材は狭く山岳と絞らず、山麓も、山に生きる動植物、山にちなむ民話伝説、天象、人の生活まで広範囲にそれを求めています。

当会は、東京において毎年定例展を開催、昭和五十九年(一九八四)以来ほぼ五年ごとに、ここ「大町山岳博物館」で特別展を開催しております。今年はその第五回目の展覧会を同館のご厚意により一ヶ月余りにわたり開催する運びとなりました。

ご来館の皆様にも会員作品をご高覧いただけますことを、深い喜びと感じております。

大町山岳博物館のご厚意とご協力に対し、会員一同から感謝申しあげる次第です。

相性のいいマッターホルン

岩切岑泰

毎年のように異常気象ではないかと言われているが、昨年(二〇〇二)のそれは雨量の多さにあったようである。ヨーロッパ大陸全体に、記録的な量の雨が降った。

スイスのツェルマットを訪ねた初日は雨が降っていた。翌日も、雨天で夜が明けた。やむなくホテルのベランダで雨が上がるのを待ったが、静かに眺めているとなかなかに変化に満ちていて面白い。山麓全体が小雨にけむっていかと思うと、谷間の雲がゆっくり動いて、一段奥の山肌がはっとする程の美しさを見せてくれたりする。時たま町のシンボルであるマッターホルンが姿を見せる瞬間もある。時々も変化を止めることはないのである。次々に変貌していく面白さに見とれ、飽かず眺めながら写生を続けた。F6の画用紙を上下に繋ぎ、一日かかってようやく収めることが出来た。

雨上がりの町は、清々しい空気に満たされていた。今回もマッターホルンと再会出来て満足であった。改めて振り返ってみると、今



雨上がりのツェルマット 岩切岑泰

回で六度目である。そして、今迄に会えなかったことは一度もないことに気が付いた。余程相性がいいんだろうな、と思っている。

祖父岳にて(絵かきの山登り)

上田 太郎

昨年九月末、富山県折立登山口から太郎平、雲の平を経て祖父岳へ、更に鷲羽、三俣蓮華、双六、天候次第では欲張って槍ヶ岳へと全行程九日間の写生登山に臨む。同行してくれるのは若き岳友榎本立君である。重い画材を彼の背に託し、さあ出発である。強風にあおられた初日。雨の二日目、熊笹の中の登山道はさながら川の様である。薬師沢では音を立てて流れ下る黒部川のすさまじさに啞然として小屋に逃げ込む。翌朝は打って変ったの快晴。人影のない稜線から薬師、水晶、黒部五郎と矢継ぎ早に写生、誠に上機嫌である。テンバでは夕映えの美しさに感動し、やがて祖父岳の左斜面上に浮ぶ満月が光を増す。この上ない至福の時が流れる。早朝、寒さに目覚めると外は霜柱である。寒いが今日も快晴。今回の主目的、祖父岳山頂からのパノラマ写生の



祖父岳にて 上田太郎

とき間近である。一時間で山頂に出る。何と言う眺めか。槍ヶ岳を望める場所を求めて随分たくさんの山登りをしたが、この眺めは別格である。空気にそそり立つ槍の雄姿。左に北鎌尾根、右には大喰から西穂迄の山々を従え、正に山の千両役者の勢揃いである。目を左右に振れば三俣蓮華と鷲羽岳が、中央には西鎌尾根の稜線がうねりを繰り返す。山岳画協会大町展出品作「祖父岳にて」はその時の絵である。

冬の喜び

江村真一

越年の山を、鹿島槍ヶ岳と爺ヶ岳と決め信濃大町へ向う。

薄明るくなった大谷原で朝食を取り大冷沢ぞいの平坦な道を西俣出合へと進む。ここからは、北俣本谷の奥に朝日に輝く東尾根が実に美しく望まれた。さすがに赤岩尾根の急登



厳冬鹿島槍ヶ岳 江村真一

になると冬山の荷が重く汗をかく程だ。しかし雪道とはいえ、ラッセルされていてかえって歩きやすい。高千穂平には、すでに先行パーティーがいくつもテントを張っている。整地しながら空を見ると、明らかに天候は下り坂だ。夜半から雪が降りしきる。

停滞二日目の夜は、ドーン、ドーンと地獄からの叫びが腹にひびく。何度も雪崩の音で目を覚ます。朝、雪は止んでいるが視界はない。下山していくパーティーが多い。目的地を爺ヶ岳として、行ける所まで進むことにする。出発して間もなく、梢のあちらこちらで何か動くものが見える。雷鳥の群だ。爪の先まで真白な冬毛につつまれ、夏の二倍ぐらいには見える。必死についばんでいる。こんな最悪の条件で生きているのだ。話にはよく聞

を感じざるを得ない。ラッセルで時間を食うが、稜線に出るころには、ガスが上り始め鹿島槍の上部が見えてきた。信州側の雪庇に氣を付けて進む。新雪は、風に飛ばされ、クラストした雪面にアイゼンが良く利く。頂上、我がパーティーで独占する。何と言うことか、周囲の全てのペールは、剥かれて鹿島槍の全容、そしてハッ峰や源次郎尾根の雪化粧をした剣岳、間近に針ノ木岳と惜しみなく冬姿の山々を見せてくれた。

山の女神と山仲間に関心より感謝する冬山行であった。

「カイラス山」と「雪の食卓」

熊谷

樫

表紙とポスターになった「カイラス山」は数年前ネパールからチベット高原を車で越えて山麓を歩いて半周したとき、最初の峠から見たカイラス山だ。どの峠もチベット仏教の五色旗がはためき供えられた白布がまわりつき脱いだ靴や衣類が散乱している。高度が五千メートルを越えているのに驚いたことに

カラスがいる。手前のヤクの頭骨は自分のイメージで描き加えた。カイラス一周五二キロを地元の人達は走るように一日で回り、あるいは一ヶ月かけて五体投地で回る。

「雪の食卓」は昨年蓮華温泉の山スキーに行ったときのものである。母池から天狗平を越えて蓮華温泉に一泊して、次の日角小屋峠をこえて平岩に向う。峠の下でお昼をするとき、案内してくれた「星の家」のセイさん(右)が雪面を掘って食卓を作ってくれた。正面のうちの美術館のスタッフのダンナでもあるタカシさんは山屋で、日本の山をほとんどパラグライダーで飛んでいる。その左の高野山麓で陶芸をやっているシゲさんは、沢登りが得意だがスキーは苦手で、登りのおそい私が下りで追越すと「この婆さん何で」とおこる。私の山の絵に昼食が多いのは、このときしかスケッチする時間がないからだ。

鹿島槍冠雪

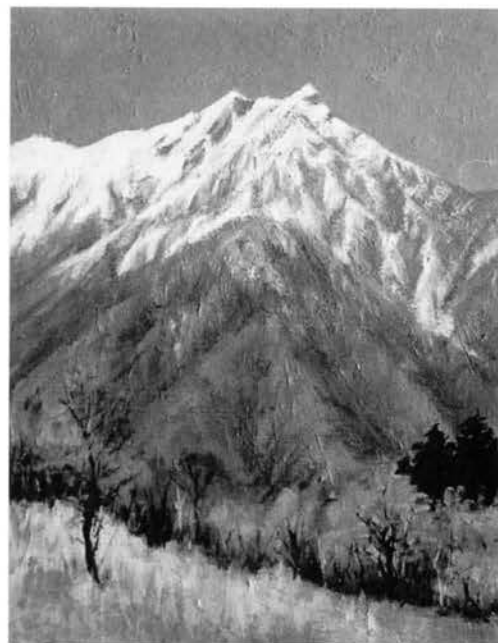
松本から糸魚川にぬける大糸線に沿って北

後藤三男

角小屋峠で 熊谷 樫

へ広がる一帯の安曇野の最も美しい季節は早春から梅雨前にかけてのころで、厳しい寒さに耐えていた樹々が目を覚ましたように蕾をふくらませ花々が一斉に咲きはじめるまぶしいような新緑となり蝶や鳥が群れて春を謳歌する。

広大な安曇野を辿って大町に至ると大糸線の車窓に東西から迫る山地に



鹿島槍冠雪 後藤三男

で行く機会を失ってしまった。しかし昨年、例年十月に山岳画協会が主催しているスケッチ教室に参加することができ四十年ぶりに槍にゆく機会を得た。

久しぶりの上高地から横尾の道は快適であり、そして槍沢ロッヂへ、ここで一泊した。ところが悪いことに台風が明日の夜、関東を直撃との予報にがっかりしてしまった。

翌日の朝は空を見ると、雲が足早にゆきかい台風の襲来を上げていた。早々槍をめざし登りはじめたが、槍の姿は見えなくなり、槍岳山荘に着いた時は風雨が強く、ガスで視界

絞られるように狭まれて終息する。その西に立てかけた屏風のように連なる後立山連峰の中央に均整のとれた双耳峰をもった主峰鹿島槍ヶ岳が左右の爺ヶ岳、五龍岳に支えられるように屹立し屈指の美しい姿を見せている。

春先雪解けとともに鹿島槍の残雪は獅子、鶴の雪形を表し、少しずつ白い衣を脱いで行き初夏になるとシーズン到来。アプローチは扇沢から種池、爺ヶ岳から五龍、唐松、白馬への縦走路、また、その反対のコースは岩小屋沢岳から新越乗越、スバリ、針ノ木に至るコースで、入・下山口も多く日程も組立て易いところで、縦走路からは左に黒部の谷越しに剣、立山連峰、右は白馬、さらに信越の山を眺望できる。

槍沢を下る

須藤卓男



槍沢を下る 須藤卓男

ゼロであった。夜は講師の方々と一杯飲みながら明日の天候の回復を願い、床についた。目が覚めると台風は猛スピードで北へ過ぎ去っていたが、台風一過の晴天には程とおかつた。しかし槍沢側は何とか西岳、南岳と顔を見せはじめ、槍沢を途中まで下ると待望のスケッチをすることができた。この作品はその時のものである。しかし一番の目的は槍の雄姿を描きたいと思っている。今年の十月には再度挑戦するつもりである。

針ノ木岳 花の旅

高橋てる子

たくさんのお花に出会いたい。花とゆつくりおしゃべりしたい。花をゆつくり描いてみたいと日頃の願いをかなえてくれた。

その山旅は、扇沢より柏原新道を歩き、種池山荘、新越乗越の花の路を歩くことにした。花に囲まれていた種池山荘であったが、爺ヶ岳は雲の中で断念して、山荘で花と遊ぶ。翌朝、雨で始まった新越乗越までの道は、なにも見えぬ霧雨だが、登山道の両側は、シ



針ノ木岳とお花畑 高橋てる子

シウド、一面紫のトリカブト、ハクサンフウロ、ウサギギクと咲き乱れ、濡れている。時どき雲の切れ目から稜線に、新越山荘の赤い屋根だけが、見え隠れしている。いつまでも続く花の道を歩き、山荘に着く頃は、雨も上りはじめた。山荘の一面のお花畑の壮観さは感動である。可憐なピンクのハクサンフウロ、真赤に華やかに咲くクルマユリ、可愛いキンポウゲ。花としゃべって夢中にひたすら写生した。

次の日、針ノ木岳、剣岳、立山連峰、鹿島槍は、青い空に、その雄姿は、緑の谷にまで深く、北アルプスの輝く美しさは、私の心に深く刻んだ風景であった。

山の短い夏の花旅の印象を描いてみた。

滝谷二題

武井 清

古いスケッチブックのなかから、滝谷の絵が出てきた。淡彩画で紙も黄ばんで変色したかなり古いものだ。みているうちに、若い頃に初めて北穂高へ登った時の記憶が急に、よみがえってきた。—そう、あの時画いたものだ。薄暗い岩壁のなかで、きわだつて急峻な壁が赤く染まった滝谷の全容を目の前にして、云いしれぬ感動で身動き出来ず、しばらく茫然としていたことを思い出す。

この時が、私が山を画く大きな動機づけとなったことは間違いない。

以来、幾度となくこの岩の壁を画きに出掛けたが、未だ一度として同じ表情をみせたことは



四月の滝谷 武井 清

ない。春、残雪におおわれた岩稜、夏から秋にかけて、夕日にひかり輝く岩壁、その度に違った顔をみせてくれる滝谷が、私は好きだ。今、画室にこの古ぼけた小さな滝谷の絵が、かかっている。この先、この絵をとりはずすことはないだろう。

白馬八方新雪

中村勝久

北アルプスの山々の眺望にあこがれ、大阪から安曇野に移住して四年が過ぎました。

北国の厳しさを覚悟しての一大決心でしたが、人も自然もやさしく、快適な日々です。

それでも今年の冬は早くから雪がきて、山は十一月から真白になりました。白馬村に毎日のようにスケッチに出かけましたが、雪の割には寒くなく、一日中外にいてもさほど苦になることはありませんでした。(もともと防寒具や野外用ストーブなど、便利なもののおかげですが。)



白馬八方新雪 中村勝久

雪後の快晴は、カーンと響くような青空で雪がまぶしく、時々サンングラスを外して調子を見比べますが、光り輝く白の変化を表現することなどとてもできるものではありません。

一月、二月には、二十、三十センチの雪が度々あり、随分雪の絵を多く描きました。その中の一枚「白馬八方新雪」です。

山の風貌

平沢利夫

自然と人との共生を考え続けているもの書きの人と小さな旅をした。彼はゆく先々のお宮や寺の手前で立ち止まり、じっと見つめる。度々のことなので、何を見ているのかを尋ねると「そこにはカミヤホトケを祀りたくなる気配がある。聖性とでも云うか」と独り言のようにつぶやき、人には原初からそうした界限性を感じする機能があつて、聖域を嗅ぎ分けたのではないかと続けた。

モンズン明けの十月、六度目のネパールへ入った。三十年前と二十二年前に歩いたアンナプルナ周辺は、まだ静かなトレッキングを楽しめたが、久しぶりに訪れてビックリ。

静かなマナスルへの道

堀越 昇

描きたい山を訪ね歩いた自分の中にも、山の聖性に反応する遺伝子センサーがあるのかも知れないと思ったが、キザなように思えて口にはしなかった。

古代人は山上を祖霊の棲む聖域として崇めたとされるが、高い所で一人茫として山に對してると、同じ山容が異なった貌を見せてくる。尊厳、崇高、不動が混然とした絶対者の風格とでも云おうか。

次第に高い所に行けなくなる昨今は、戸隠連山を下から眺めて山の風貌を描いている。



立道から戸隠西岳 平沢利夫



マナスル三山遠望 (ネパール) 堀越 昇

「こつちを見て！」と言っても人間のモデルのように言うことを聞いてくれず、スケッチは難しかった。

アンボセリはオルトカイ・ロッジに五泊、天候にも恵まれ大版のスケッチもできた。今回の出品作はそれを基にスケッチ中多く見かけた鳥を配置してみたもの。象や縞馬などもロッジを囲む柵の近くまで寄ってくるが、よく動くうえ、

「こつちを見て！」と言っても人間のモデルのように言うことを聞いてくれず、スケッチは難しかった。

アンボセリはオルトカイ・ロッジに五泊、天候にも恵まれ大版のスケッチもできた。今回の出品作はそれを基にスケッチ中多く見かけた鳥を配置してみたもの。象や縞馬などもロッジを囲む柵の近くまで寄ってくるが、よく動くうえ、

大勢のトレkkerは良しとして、客引きや辻音楽師、物乞いまで出没する山道には辟易、などと昔を懐かしむのはトシのせいかな。

とはいえ、今回の取材の目的地、マナスル三山の恰好の展望台でもあるバグルン・パニ峠へのコースは、村人以外誰と出会うこともなく、本来の静かな山旅を味わわせてくれたのでほっとした。反面、本コースはモウイストと云われるゲリラ組織による掠奪や殺戮もある危険地域と云われ、敬遠されているが、銃を携えた十数名のバトロール隊が時々山中を巡回しているので、安心やら、怖いやら。

出品作品はバグルン・パニより望んだもので向かって左よりマナスル、P29、ヒマールチュリであるが、実際にはヒマールチュリは頭二つ分、画面から右側にはみ出しているの

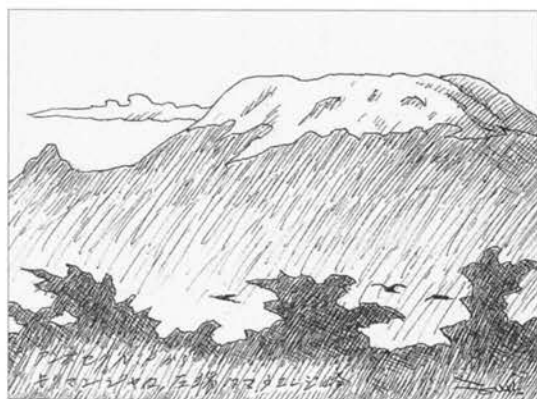
で、グッと左に引き寄せ、さらにマナスルもやや奥まっているため低く見えるので、三山の盟主らしく少し背伸びさせて描いた。

因みに世界第八位の高峰マナスルを始め三山はすべて日本隊による初登頂の秀峰である。

朝のキリマンジャロ

牧 潤一

アフリカの最高峰キリマンジャロ（標高五八九五m）の山体と登山路のすべてはタンザニアにあるが、その雄大な姿はケニアのサファリ・パークとして著名なアンボセリ国立公園あたりから望むのが一番だといわれている。



ケニア、アンボセリ国立公園からキリマンジャロ、左端はマウエンジ峰 牧 潤一

チヨモランマBCへの旅

増田 欣子

チヨモランマを描きたく旅に出たのは五月の事であった。BCへの道は、チベットの人々に始まる長くて厳しい車の旅、しかし、その壮大な景観は、過酷な旅の苦勞を忘れさせてくれる程の美しさであった。

中でも印象的だったのは、ヤムドク・ツォ（トルコ石の湖）。乾燥の大地を見慣れた目に、湖の青は心にしみる深さであった。遙かな白い峰ニンチンカンサ、道は複雑な入り江に沿ってじぐざぐに続く。

本格的にチョモランマが望めるパン・ラ（五一五〇四）、ヒマラヤ連山の大パノラマ、その中にひとときわ堂々としたチョモランマ。BCの手前にあるロンブク寺院、こんな所にも修行に励む人達がいる。

この年の五月は好天に恵まれ、各国の登山隊の登頂があいついだ。日中は穏やかだが、夕方には砂嵐が。標高五二〇〇メートルでのテント泊とあって、高山病の症状が出て、安眠出来ない。夜明け、チョモランマは朝の光の中に目覚めていく。荘厳なチョモランマの黎明…。

人類がチョモランマに初登頂して五十年、そのゆかりの年に、「チョモランマ黎明」を出品出来たことを心から嬉しく思っている。



チョモランマ黎明 増田欣子



芽吹く頃（越後三山） 松原修司

芽吹く頃

松原修司

長い冬も終り森羅万象ごとく生きづき山々の衣替えの季節を迎える。

五月上旬、山の除雪も終りカラ松の芽吹く頃の越後三山は、ことのほか好きなモチーフである。標高二〇〇〇メートルそこそこであるが、八海山のハッ峰より一氣に落ち込む高倉沢、中之岳、駒ヶ岳の稜線はアルペンの山容であり、クロームグリーンのカラ松の芽吹きが、残雪の三山に映え牧歌的な雰囲気をもたらし出している。

とかく越後魚沼地方では、やたらと杉林が多いが、ここ「関越道堀之内IC」からほど近い大平牧場

はカラ松林が目立ち隠れた写生地と云える。

幼少の頃から八海、銀山（地元の古老達に中之岳を銀山と呼んでいた？）、駒ヶ岳と聞かされ馴れ親しんで来た三山も、奥只見銀山平の北之岐附近からは山容が一変し、それぞれの表情があり題材に事欠かない。

八海山に「田掻き馬」の雪形があらわれると一斉に農作業がはじまり、里山は山菜採りで賑わい夏に向って日増しに緑を濃くして行く。山の祭りが近づく頃、地酒「八海山」で一杯やりながら飽くこともなく残雪を求め、更なる追求に自問自答の昨今である。

私の作品についてなど…

若林晴男

前回の展覧会からまた五年が経過した。昭和五十九年に初めてこの博物館で、当会の展覧会を開かせて頂いてから十九年、この間に鬼籍に入った先輩や、会から退いて行った方々もあり、現在のメンバーで最初から出品している者は数名になってしまった。うたた時の流れに感慨を禁じえない。

今回の私の作品は「安曇野秋景」と「爺ヶ岳五月」であるが、前者は遠景に後立山連峰を望む田園風景で謂わば山麓の風景画であって、屹立する岩峰に肉薄する山岳画ではない。この作品では山の恩恵を享けて人間が平和に生活している何かほっとする雰囲気、風景、今様に言えば心が癒されるような表現ができたらと思つて描いた。

後者は大町市郊外の黒沢高原の一角から描いた爺ヶ岳で、そのゆったりとした山容と其処から聞こえる動植物の新生の喜びの声といった様なものが、感じられたらと思つて描いた。然し意図する処と作品の出来栄との隔



安曇野秋景 若林晴男

たりを今度も痛切に感じている。

絵画を描き始めて数十年、時は経っても自分の拙さは昔と少しも変わらぬことを痛感し、今後とも精進を怠つてはいけなさと、再び自戒の念を強くした次第である。

山と博物館

第48巻第6号

発行 市立大町山岳博物館
〒999-8501 長野県大町市大字大町八〇五六一

TEL 〇二六二二二〇二二
FAX 〇二六二二二二二二

E-mail: smpk@city.omachi.nagano.jp
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/smpk/

印刷 株奥村印刷
定価 年額一、五〇〇円（送料共）（切手不可）

郵便振替口座番号 〇〇五四〇七一三三九三